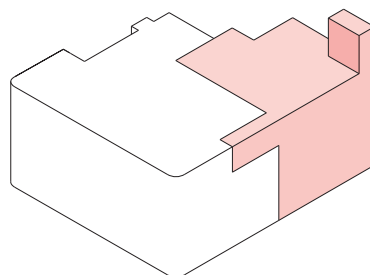


b. 増築部分の外観分析

b-1. ボリューム

増築部分のボリュームは、既存部分と同じ8階建てで、高さが揃えられている。

通りに面した南側立面においては、既存部分の東側3柱間分の7,8階にあったバルコニーが増築によって内部化されている。立面の欠けた部分が補われ、南側立面は幅約80m、高さ約33mの、一枚の大きな壁面となった。



塗りつぶし部分が1952年完成部分

b-2. 南側立面の分析

ここでは、現在も通りに面して残る南側立面について分析する。

・分割された立面

増築部分の南側立面は3つに分けられ、異なるデザインがなされている。

3つとは、

- ・既存の様式的な立面を延長した7,8階
- ・ガラスブロック壁による既存部分とは対比的な2-6階
- ・既存のショーウィンドウのある立面を延長した1階

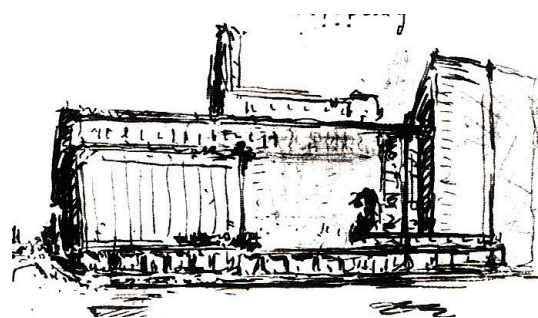
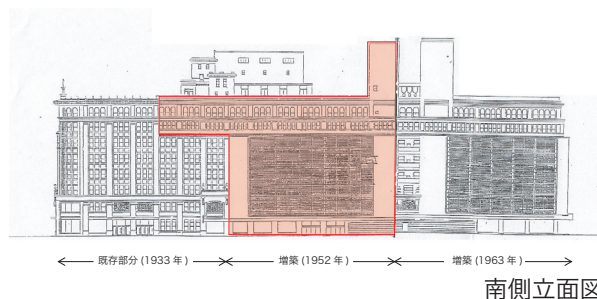
である。

このように階によって別々のデザインがなされた背景には、当時7,8階を日本生命が使用していたことがある。設計者である村野藤吾によれば、1-6階に入る高島屋百貨店は明るくモダンな表現を、7,8階に入る日本生命は会社の品格に落とさない(モダンすぎない)表現を、それぞれ要求していた。

そこで村野は、7,8階は本館と同じ建築様式で新館に続けて連続感を持たせ、2-6階はガラスブロック張りとして、本館と質感の差がある壁面をつなぎ合わせた。

村野のスケッチを見ると、7,8階と1階では既存部分と同じ表現が延長されているのに対して、2-6階では既存部分の縦線が消えて対比的な表現になっている。

つまり、増築部分の一部にのみ既存の様式的な立面を延長する、という方法が用いられている。



村野による南側外観のスケッチ

7,8階

7,8階では、既存の様式的な立面を延長しているが、そっくりそのまま延長しているのではない。構成などの基本的な部分を延長しながら、外装材や要素の詳細は既存部分と異なっている。

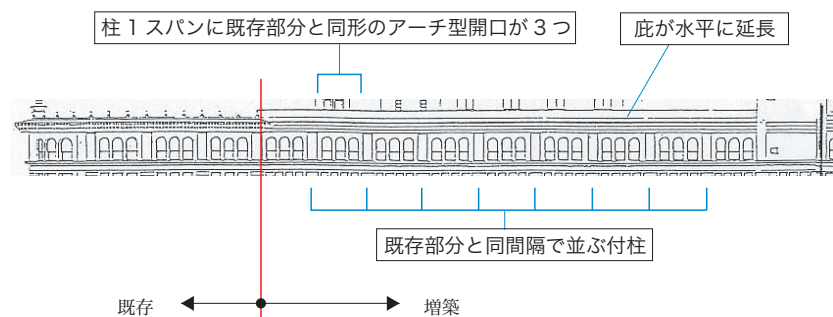


7,8階立面写真

・構成の連続

8階の立面の構成は、既存部分と同様のものを連続させている。

既存部分と同じ間隔で付柱が並び、柱1スパンにアーチ型開口が3つ並ぶ。アーチ型開口の形態は、既存部分と同じである。また頂部の庇も、水平に延長されている。

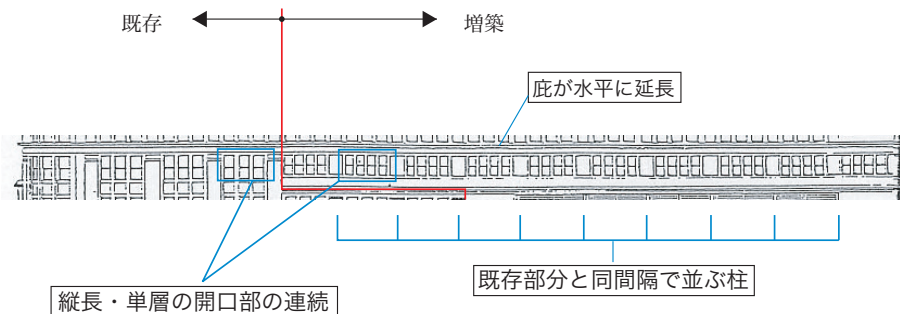


8階立面における連続

7階の立面の構成は、既存部分のものをおおむね連続させているが、8階の連続の仕方と比べて、より変化を含んだ連続である。

既存部分と同じ間隔で柱が並び、柱の間に縦長のプロポーションの開口部が並ぶ。7階と8階の間の庇は水平に延長されている。

1スパンあたりの開口部の数は、既存部分では3つだったが、増築部分では4つに増えている。その大きさは異なるが、単窓として縦長のプロポーションを維持することで、既存部分との連続を保っている。



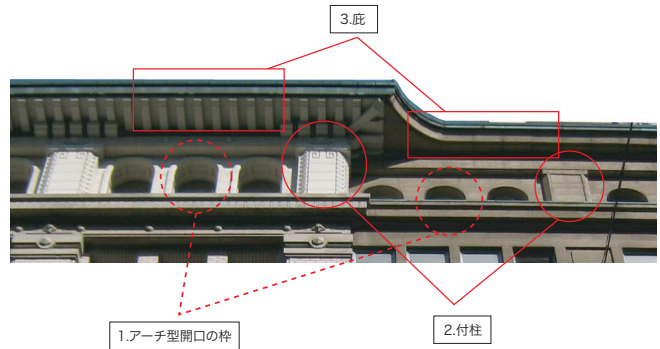
7階立面における連続

・対比

より詳細に形態を見ると、既存部分に見られた柱梁による骨組みの表現や装飾的表現が、増築部分では凹凸のない皮膜的表現に近づき、装飾はなくなっている。

既存部分から増築部分にかけて、以下のような変化があった。

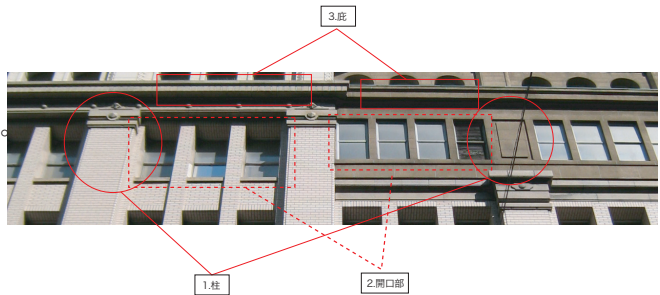
- ・ 8階の付柱の壁面からの出は小さくなり、彫り込まれた装飾は簡素化されている。
- ・ 8階のアーチ型開口の枠が、壁面から出がなくなり、壁面と同一面におさまられている。
- ・ 8階頂部の庇の出がカーブを描きながら小さくなり、垂木の装飾的表現が無くなっている。



	既存	増築
1.アーチ型開口の枠	壁面から出る	壁面と同一面におさまる
2.付柱	壁面からの出が大きい 装飾が施されている	壁面からの出が小さい 装飾がなく、平滑である
3.庇	出が大きい 軒の装飾がある	出が小さい 軒の装飾がない

8階立面における対比

- ・ 7階の柱の表現として付柱がなくなり、壁面に長方形の枠が彫り込まれた平滑な表現になっている。
- ・ 7階の開口部の奥行きが既存部分に比べて浅くなっている。
- ・ 7・8階の間の庇の出が小さくなっている。



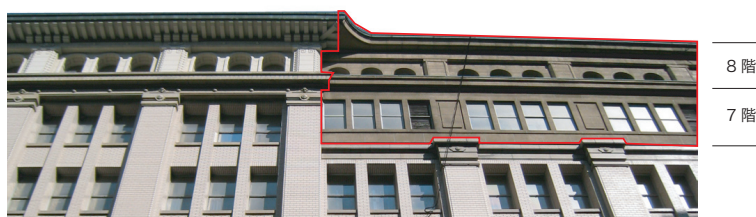
	既存	増築
1.柱	付柱で壁面から出る	壁面と同一面におさまる
2.開口部	1スパンに3つ 奥行きが深い	1スパンに4つ 奥行きが浅い
3.庇	出が大きい	出が小さい

7階立面における対比

また外装材は、既存部分のクリーム色の石貼り・タイル貼りから、コンクリートのような色合いのグレーの石貼りになっている。

	既存部分	増築部分
8階	クリーム色の石貼り	グレーの石貼り
7階	クリーム色のタイル貼り	

増築部分



素材の切り替え

2-6階

2-6階では、既存部分と対比的な構成の立面となっているが、何の連続もないまったくの対比かといえば、そうではない。

構成や形態は対比的ながら、素材やサッシュの割付において既存部分との連続をもつ。

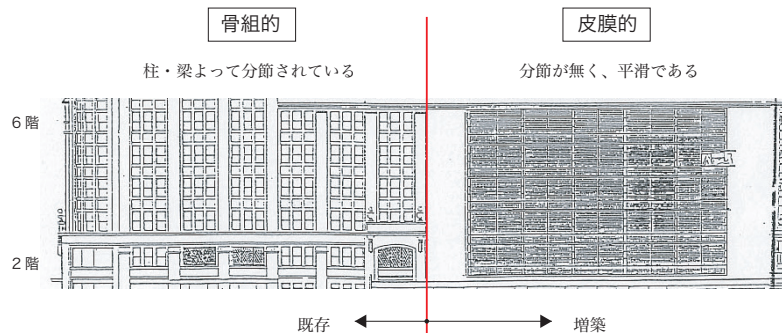


2-6階立面の写真

・対比的な立面

両端の柱1スパン分は開口部のない平滑な壁面で、それに挟まれた柱5スパン分は縦ガラスブロック張りの壁面である。

既存部分の柱によって分節された骨組的な表現に対して、増築部分は分節がなく平滑で皮膜的な表現となっている。



2-6階立面図

設計者である村野藤吾が「(前略)窓無し of 建物にしようと思ったんです。窓無しだけでモダンになりますからね。近代の百貨店は窓がないですからね。(後略)」と語っているように、この平滑で窓のない皮膜的な壁面はモダニズムの表現であり、折衷様式の骨組的な立面とは対比的である。

・素材とサッシの割付の連続

立面の構成や形態は対比的であるが、その他の要素で既存部分と連続している。

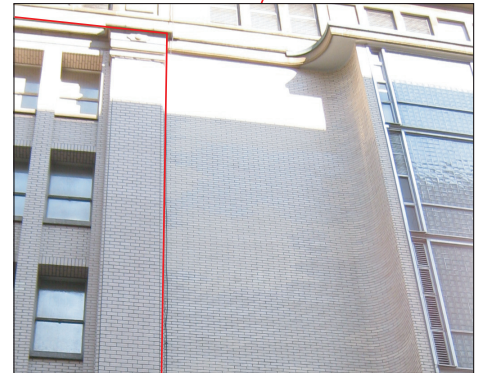
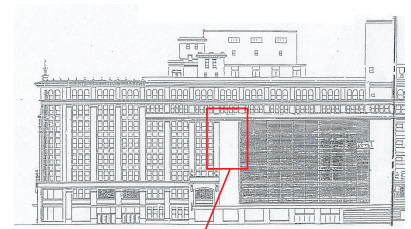
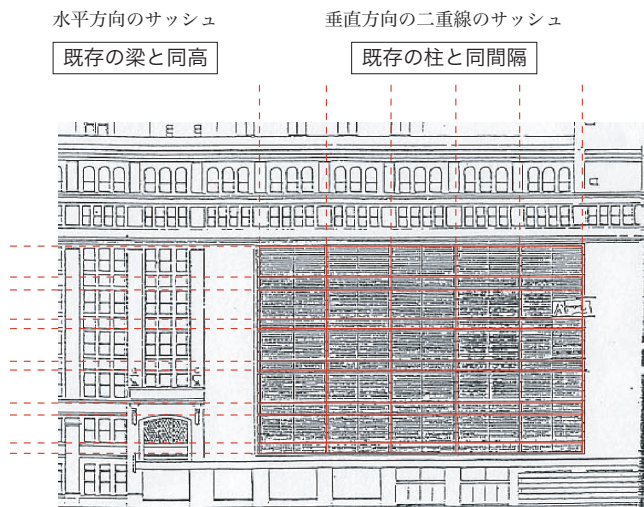
両端1スパンずつの壁面の外装材は、既存部分と同じクリーム色のタイル貼りである。

また、ガラスブロック壁のサッシに着目してみると

- ・垂直方向の二重線のサッシは、既存の柱と同間隔につけられている。
- ・水平方向については、既存部分の梁の上下のラインを延長したところにそれぞれサッシがある。

ことがわかった。

ガラスブロック面の分割において、既存部分の立面における垂直線・水平線が用いることで、立面のスケールを連続させている。

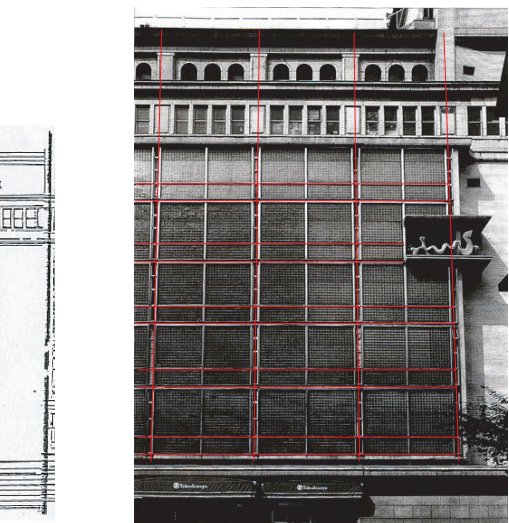


既存部分

増築部分

外装材はどちらもクリーム色のタイル貼り

2-6 階素材の連続

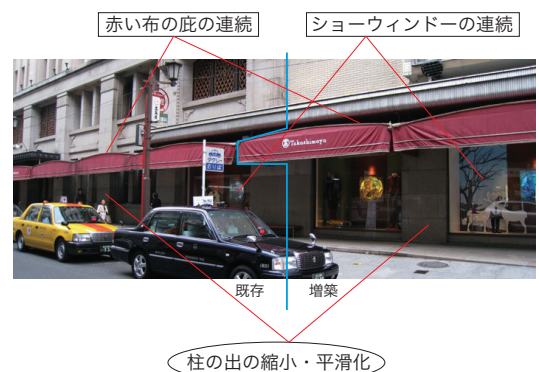


2-6 階サッシにおける立面スケールの連続

1 階

1 階部分では、既存部分から赤い布による庇が水平に連続し、柱間に大きなガラスのショーウィンドウがある、というのも同じである。

柱の壁面からの出は、既存部分と比べて小さくなり、また凸凹がなくなり、平滑な仕上げとなっている。



1 階の連続と対比

(2) 大阪ガスビル

設計：安井建築設計事務所
大阪府大阪市
増築部分：1966 年竣工
既存部分：1933 年竣工



御堂筋側から見た東側外観

a. 背景

大阪ガスビルは、安井武雄の設計により 1933 年に完成した。この年、大阪初の地下鉄が開通し、それまで堂島、北浜に集中していた都心が新たな展開を始めていた御堂筋のオフィス第 1 号であった。

この建物は、最新の冷暖房設備やエレベーター 4 基で各階を上下に連結する方式を採用し、当時のオフィスビルのレベルから見て驚くべき新しい設備を備えていた。

外観は、淡いクリーム色の四角いタイルと黒の花崗岩を用いて、水平の庇とカーブのある柱形、縦長のプロポーションの開口部が特徴である。

1966 年、安井建築設計事務所・佐野正一の設計により既存部分の北側に新館が増築された。佐野によれば、旧館完成当初、北側に増築することはまったく計画されていなかったという。



1933 年 竣工当時の外観



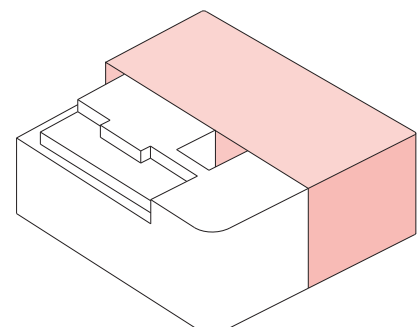
1966 年 竣工当時の東側外観

b. 増築部分の外観分析

b-1. ボリューム

増築部分のボリュームは、既存部分と同じ 8 階建てで、高さが揃えられている。既存部分と増築部分で、1 つの街区型のボリュームを形成している。

御堂筋に面した東側立面は、左を旧館、右を新館が構成する 1 枚の立面となっている。



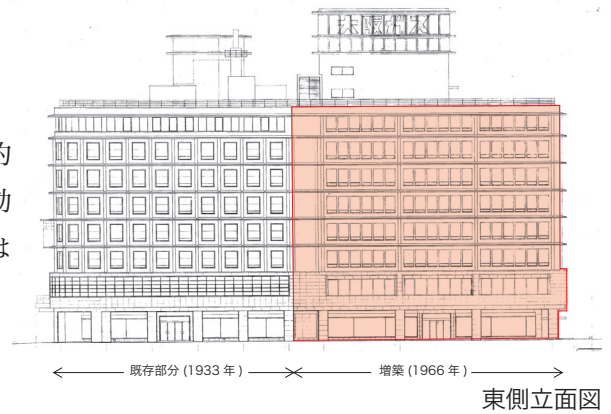
塗りつぶし部分が 1966 年完成部分

b-2. 東側立面の分析

ここでは特に御堂筋に面した東側立面について分析する。

増築部分がすすんだ設備を持ち、技術的に高く、また貸オフィスとして経営的に効率の良いものとするために、柱のスパンは9.9m × 6.0m と大きくなった。

(既存部分は 5.8m × 5.9m)



・外装材の連続

増築部分の外装材は、既存部分と揃えてある。

1,2階は黒花崗石貼り本磨きで、石1ピースの大きさもほぼ同じである。

3-8階は白の磁器釉掛けタイル貼りで、タイルの大きさも同じである。

1,2階 黒花崗石貼り本磨き



既存 増築

3-8階 白の磁器釉掛けタイル貼り



既存 増築

外装材の連続

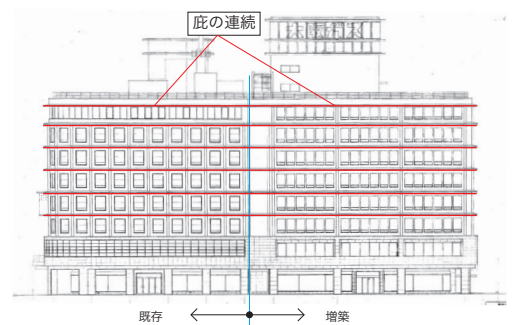
・庇の連続 / ディテールの変化

既存部分から増築部分にかけて、各階のフロアラインにあたる部分に900mmの出をもつ庇を水平に連続させている。

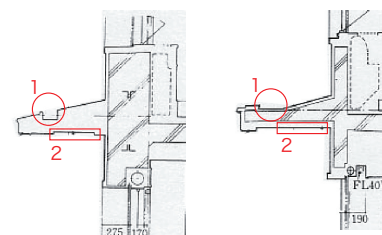
庇のディテールは新旧で異なっている。

既存部分の庇上には照明器具が取り付けられ、夜間に建物全体をライトアップしていた。増築部分の庇には照明器具は内蔵されていない。また既存部分の庇裏はタイル貼りで仕上げられていたが、増築部分ではタイル目地加工のボードが貼られている。

現在の既存部分の庇は改修されたもので、内蔵されていた照明器具は漏電等の事故が多く維持管理が困難だったため撤去されその他の仕上げは増築部分の庇と同じになっている。



庇の連続



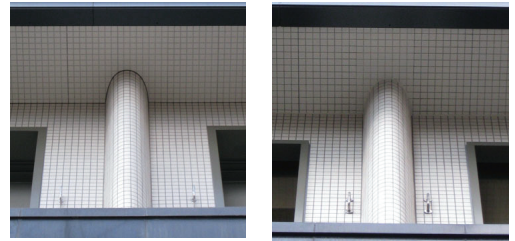
	既存	増築
1	照明器具を内蔵	照明器具はない
2	タイル貼り	タイル目地のボード

ディテールの変化

・付柱

既存部分には、2,950mm 間隔で半楕円断面の付柱がある。

増築部分では、9,900mm 間隔で同じ付柱が見られる。



既存

増築

付柱

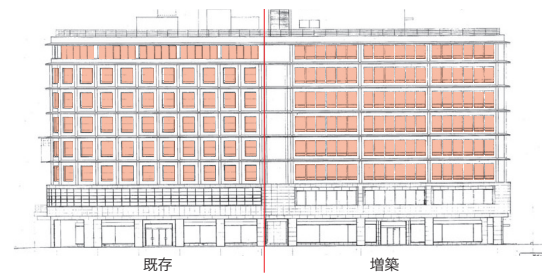
・開口部

3-8 階の開口部に着目する。

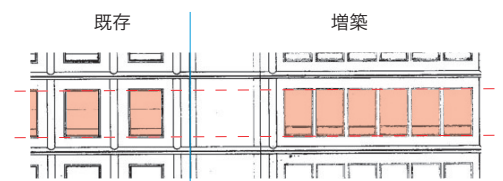
増築部分では、採光上の条件から窓面積を拡大しなければならなかった。そこで構造柱の間の壁には大きな開口部がとられている。(既存部分では構造柱は 5.9m スパンで、1 スパンあたり 2 つの単窓が穿たれ、増築部分では構造柱は 9.9m スパンで、1 スパンあたり 6 つの窓が横に連続して穿たれている。)

しかし、開口部の縦方向の大きさを揃えていること、また横連窓とせず、開口部の間に壁面を残して縦長のプロポーションの開口部の連続としていること、で既存部分の縦長単窓との連続を保っている。

開口部の奥行きは、増築部分では既存部分より浅くなっている。詳細を見ると、既存部分の奥行きは 275mm で壁面が構造を担っている。増築部分の奥行きは 175mm で内部に構造用の梁があり、壁面はメインの構造ではない。



3-8 階開口部 (塗りつぶし部が開口部)

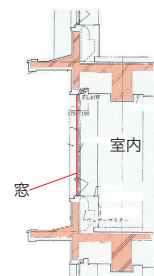
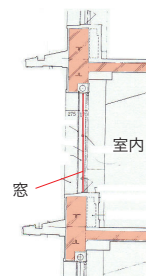
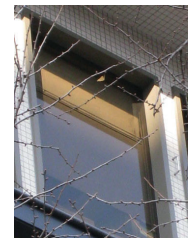


- ・縦方向の大きさが同じ
- ・縦長の窓の連続

開口部の比較

既存

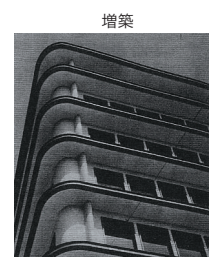
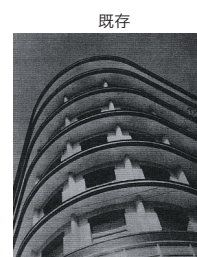
増築



開口部の奥行き

・角のカーブ

曲率は異なるが、既存部分と同じく増築部分でもコーナーで壁面・庇とも丸くカーブさせている。



角のカーブ